

Title	キリスト教の死生観（共同研究報告：臨床死生学研究）
Author(s)	越智, 裕子
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.21-No.3 : 32-33
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3529
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

【臨床死生学研究】 キリスト教の死生観

2011年7月9日（土）、聖学院大学1号館セミナールームで、臨床死生学研究会が開催された。聖学院大学総合研究所カウンセリング研究センター牧会電話相談カウンセラーで、鶴瀬恵み教会牧師、臨床パストラルスーパーバイザーの堀 肇氏から「キリスト教の死生観」というテーマで以下の内容の講演がなされた。

冒頭の序論では、キリスト教の死生学を、①ホリスティックに理解するものと、②概念として理解するものとに分類した。また、生活史における「死」の意識は、大きな危機に遭遇することで覚醒され、説教と神学研究における「死」の意識は、イースター、復活祭、葬儀などで聖書の中の生と死としてよく語られるという。

次に本論では、まず、死生学（サナトロジー）を以下の3つに分類した。（1）医学（死体の調査による死の原因研究、死体の解剖に関する研究）、（2）精神医学、心理学、看護学（死にゆ



堀 肇 鶴瀬恵み教会牧師

く人や死別した人の心理の研究)、(3) 哲学、神学(死及び死と生に向かって生きる人間の研究)である。(3) についてであるが、著名な哲学者の多くは、死の問題、特に死を乗り越えることの苦難について取り扱った。それに対して神学では、聖書の中の終末論や贖罪論でキリストの死が取り扱われてはいても、死の学問は展開していない。むしろ生に焦点を置いていることについて言及している。

その上で、キリスト教の死生観として、(1) 聖書全体では、死の神学ではなく、永遠の命とか、命や生にかかわるものに焦点が置かる。(2) 旧約聖書では、創世記で神の裁きとしての死が書かれ、詩篇では、墮落の後の生命力の欠如・減少、自然なものと書かれている。「イザヤ書」では、人間の生と死を支配するのは神であること、生命の永遠性が明示され、かつ預言的な意味での死が語られている。次に(3) 新約聖書では、死は、「ローマ人への手紙」では神の罪の裁きとして、「コリント人への第一の手紙」では死の扉の問題と死は敵として表され、この「死のとげ」がイエスの復活によって取り除かれるとされている。また、死後の問題は、第一の死として地上での死と、第二の死として終末論的な死があり、死には中間の状態があるという。

次に、プロテスタントの死生観をとりあげた。(1) マルティン・ルターの死生観。ルター神学では死の問題は、彼が修道士になるいきさつや、自身の健康問題、当時の伝染病の流行などがあり重要な問題である。ルターは「死への準備の説教」の中で、生と死について扱っている。(2)

カルヴァンの死生観。キリストの十字架の苦難と死を、神の怒りとして理解することに焦点が絞られている。(3) 現代の神学者の死生観。贖罪論とみる立場、被造性として、作られたものとして死をみる立場がある。

最後に論じたのが、キリスト教死生観を巡る課題である。(1) ターミナルケアにおける牧会者の務めがある。具体的には、スピリチュアルケア(広義の霊的ケア)と、パストラルケア(宗教的な霊性を含む狭義の霊的ケア)があり、クリスチャン霊性問題では、神との関係性で考えられ、神との和解、隣人との和解、自分との和解などが必要とされている。他にも(2) キリスト教のギリシャ的な靈魂不滅論、(3) 生と死の倫理(脳死、安楽死、自殺、人工中絶、死刑など)、(4) 死の科学化や周辺化、(5) 火葬の問題などがあげられた。

以上が、「キリスト教と死生観」とのテーマで講演された内容である。

(文責：越智裕子 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程)

(2011年7月9日、聖学院大学1号館セミナールーム)